

〔翻訳〕

## 歴史的プロジェクトとしての市民社会 近代ヨーロッパの比較史的研究\*

ユルゲン・コッカ<sup>i</sup> 著  
斎藤真緒<sup>ii</sup>，松葉正文<sup>iii</sup> 訳

1989年から1991年にかけての変革は、ヨーロッパの現状を根本的に変化させただけではない。この変革は、統合しつつあるヨーロッパの将来に対しても、新しい問題と可能性、そして危険をもたらしたのである。その結果として、ヨーロッパ史の解釈について新たな挑戦的課題が突きつけられている。

ソビエトによる東ヨーロッパに対するヘゲモニーの終焉、独裁的な共産主義の崩壊、そしてソビエト連邦解体以降、ヨーロッパは、それに先立つ数十年間のいかなる時期にもまして、一つの全体として捉えられ考えられるようになっている。なぜなら、様々なヨーロッパ諸国の社会、政治、文化は、とくに東西比較において、現在でもなお非常に異なっているもの、東西対立の時代から引き継がれた二つの世界へのヨーロッパの分裂が、多層的に絡み合ったひとつの型、市民社会という理念モデルを共通に志向する型に収斂したことは看過しえないからである。すなわち、この市民社会という理念モデル——市場経済、法治・立憲国家、多元主義、開かれた社会、代議制民主主義——が、たとえそれが実際に実現された程度と仕方において大きく異なっているにせよ、ヨーロッパの

人々の意識と現実に決定的影響を与えているのである。かつて共産主義が支配していた国々では、1989/90年に、「ヨーロッパへの回帰」が語られたが、それは西ヨーロッパモデルへの接近を意味していた。たとえ、東ヨーロッパにおける「共産主義からの脱出」が、西ヨーロッパの状態への完全な同化につながるものがほとんどまれな例外であることが間もなく明らかになったとはいえ。逆に、次第に形が見えつつあるがいまだに予測しえない新しいヨーロッパの姿というものが、「西側」内部の状況、行動可能性、そして感情のあり方にも影響を与えている。

もちろん、反対の傾向も見出される。流血をともなったユーゴスラビアの崩壊や、大陸での戦争の再来によって、それらの地域では、もともとあまり発展していなかった市民社会の萌芽が衰亡の危機に瀕している。このことがまた、全体としてのヨーロッパに反作用を及ぼしうる。

ヨーロッパ内の東西間の相互関係——情報の交換、通商その他の経済的な諸関係、制度上の結びつき、旅行、移民——は、数十年間に及ぶ鉄のカーテンによる封鎖が解除された後、いずれにせよ飛躍的な増加を見た。かなり長期にわ

i ベルリン自由大学歴史学科教授

ii 立命館大学非常勤講師

iii 立命館大学産業社会学部教授

たった西ヨーロッパと東ヨーロッパという地理的区分は、今では説得性と自明性を失った。それに代わって別の、なかには古くから存在する「中欧」や「東中欧」のようなカテゴリーが新たに現れてきた。ヨーロッパの心理上の地図は書き換えられ、それにともなって、ヨーロッパの中でのドイツの位置づけも変化している。将来のヨーロッパ統合は、冷戦終結後、より多くの障害に直面した不確実なものとなったかもしれない。しかし、それは、統合が成功裏に進展する限り、西ヨーロッパの統合にとどまらず、東部ヨーロッパの今後なお特定されるであろう地域をも編入する形で進展すると考えられる。それ故、ヨーロッパの東端はどこで終わるのかという問題は、新たな実践的重要性を獲得している。

こうしたすべての点を考慮すれば、1989 / 91年の変革は、たとえ多様な大陸の裂け目や断層を浮上させ、南東欧では克服したと考えられていた紛争を暴力的に再燃させたとしても、ヨーロッパをひとつの全体としてより強く意識させることに寄与した。こうした事態が歴史学に及ぼす帰結は、歴史的に見たヨーロッパの不確かな結びつきの探究をより強化し、また西ヨーロッパと並んで東ヨーロッパを明確に考慮の内に入れるという要請となって現れるだろう<sup>1)</sup>。

### ・対象としてのヨーロッパ史

ヨーロッパ史に関する研究は、確かに既に数多く存在し、現在もまた書かれつつある。これらから学びうることはもとより多いとはいえず<sup>2)</sup>、これまでなお十分に研究されておらずまた体系

的に結びつけて論じられてもいない幾つの特徴を強調しつつ、ヨーロッパの歴史が検討されるべきである。

とりわけ、一方におけるドイツならびに西ヨーロッパ史の研究者と他方における東ヨーロッパ史の研究者というわが国の歴史家を特徴づける分断を意図的かつシステムティックに切り崩すことが、多くの成果につながりうると思われる。その目的は、歴史研究の様々な部分的専門分野を統合することである。

（近代の）東ヨーロッパの歴史は、ドイツでは、ほとんど一貫して、ドイツおよび西ヨーロッパの（近代の）歴史とは切り離されて扱われてきた。東欧史研究者と、しばしば実際にはドイツと西ヨーロッパ史の研究者であるいわゆる全体史家との間には、少なくとも近現代史の領域においては、ほとんど研究上のつながりがない。このことは、それぞれの養成過程の相違、言語の壁、そしてそこから結果する様々な専門的能力の問題と関連している。このことは、異なる団体における組織のあり方や、労働市場の一定の分離、あるいはキャリア形成過程の相違に現れている。その根底には、かなりの程度、数十年に及び、ごく緩慢にのみ変化してきた、そして政治的に異なる志向形成につながる認識および解釈のパターンがある。それによれば、ヨーロッパには東西の格差が存在しており、ドイツ人は「ヨーロッパの中心」に居住しており、ドイツ人の視角からすれば「東」とは、いかなる基準であれ、またどこに境界を引こうと、内的なまとまりと外部との区別をもった（あるいはそのようなものを可能にする）独自の地位を有する存在なのである。こうした見方は、数十

年におよぶ冷戦と体制間対立の間にいわば避けられぬものとして現れたヨーロッパの二分割を通じてさらに強められてきたが、いまでは疑わしいものになっている。「東欧史」という個別専門分野の歴史と自己認識は、こうした認識や解釈の伝統を反映している<sup>3)</sup>。数多くのドイツ史研究者の「西欧志向」はちょうど鏡に映った像のようにこれに対応するものであり、ドイツの歴史は西ヨーロッパあるいは大西洋地域の発展を背景として構想され描き出されている。そのことは、ドイツ特有の道という考え方（常に「西欧」との比較において）の長期にわたる多様な伝統において、そしてまたドイツ連邦共和国の社会構造史の実践においても跡づけることができる<sup>4)</sup>。

そのように視角を設定し特化することに十分な根拠がありまた効果的であるにせよ、問題設定や研究者集団の分断は、ヨーロッパに対する問いや更にそれを超えた体系的な問題設定を追究しようとする場合には、うまく機能しうるものではない。いずれにせよ、地理的障壁を架橋し乗り越えるための革新的な認識の出現が期待される。伝統的に支配的であった西欧との比較という分析視角が、東欧との比較によってうまく補完されれば、それはいつかはドイツ史の支配的な解釈のあり方を変化させることになるだろう。

この作業は、東欧および他の西欧諸国の歴史家との密接な協力の下で取り組まなければならない。それは、単に（ドイツ史との比較において）東欧史と西欧史を越えたところで研究されるだけでなく、東欧と他の西欧諸国の歴史家とがともに協力して取り組まなければならない

い課題である。彼らの能力と経験が、この課題を遂行するにあたってぜひとも必要である。その際、すでに存在する多様な協力関係を利用することができる。しかし、東中欧、南東欧、東欧諸国の歴史家との共同作業においてドイツ連邦共和国の歴史家は、西欧・北欧・南欧の人々との間で数十年間にわたって発展させ成熟させてきた多くのものと同様のものを、強化しなければならない。新たにつくられる研究センターは、ヨーロッパ各地からやって来る歴史家の出会いの場となるべきである。この作業は、地域的な特殊化を乗り越えるヨーロッパの歴史家文化を強化し、さらにはヨーロッパの知的公共圏の成立にも幾分か寄与することになるだろう。

### ・比較研究と移転の歴史

上記のような営為は、方法的には次のように特徴づけられるべきである。すなわち、体系的な比較と移転の歴史（広い意味での相互関係史）とが（新たに発展させるべき形態で）混合されなければならない。歴史的比較は、これまで国際的な歴史学においてただ萌芽的のみ実現されたにすぎない卓越した認識機会を提供している。歴史学的比較は、二つあるいはそれ以上の歴史的現象を類似性と相違性という観点から体系的に研究し、これに基づいてできるだけ信頼できる記述や説明、そして歴史的な行為・経験・過程・構造についてのより高度な命題に至るために行なわれる。しばしば、別の国、別の社会、そして別の世界へ目を向けることは、自国の歴史についてのよりよい認識、一般的に言えば、比較されている現象の特殊性についてのより正確な理解をもたらしてくれる。しかし比

比較はまた、考察されているものの共通性を浮き彫りにし、一般化する命題に到達したり、あるいは広く行なわれている一般化を批判することにも寄与する。比較は、歴史的類型論の構築にも活用することができる。包括的な歴史的総合は、しばしば比較のための核をもっている。比較は重要な問題発見的機能をもっている。つまり比較は、新たな問題の定式化を可能にする。比較の光に当てて初めて、多くの知見がその自明性を失う。比較によって、その都度興味の対象となる事例が、より多くの可能性のひとつとして現れる。つまり、可能性についての意識が拡大するのである。比較は、歴史学において今なお支配的な自国の歴史に過度に集中する傾向を、国を越えたものの見方に向けて越え出て行くためにも有効である。比較は、歴史的思考の「脱地方化」に役立つ。比較はさらに、選び取られた概念を批判的に見ることをしばしば可能にし、それら概念の文化的特殊性や歴史的被拘束性を明らかにするのに役立つ<sup>5)</sup>。

しかし、この新しい研究センターは、歴史比較の現在支配的な研究のあり方を、三重の意味で乗り越え、さらに発展させるであろう。ひとつには、これまでの研究実践では、幾つかの重要な例外を除けば、むしろ周縁部に留まっていた西欧・中欧・東欧間の比較が本センターの活動の明確な対象となるだろう<sup>6)</sup>。それによって、他方では、居住地や民族（Ethnien, Nationalitäten）や文化が複雑に混在している状態が典型的で、また相対的に遅れて不完全な形で国民国家秩序が形成された地域が、関心の的となる<sup>7)</sup>。しかし歴史的比較は、ドイツの歴史家による近現代史では、従来とりわけ国民国家によって規定された諸単位（国家、社会、文

化）間の比較として取り組まれてきた（主として西欧に眼を向けながら）。東欧を組み込むという分析視角の決定的な拡大と再定置は、比較研究という企図の革新を必要とする。つまり一方では、空間的に小さな単位の選択（地域あるいは部分地域）を、他方では鳥瞰的なまなざし（ヨーロッパ内の大きな諸地域）を、しかしとりわけ、これが第三点目であるが、移転の歴史（相互関係史）との緊密な結合や「〔ヨーロッパ〕外部地域性」の問題についての実験的取り組みを必要とする。私達は、比較という観点から、類似性や相違性、そしてそれに基づいてヨーロッパの収斂や拡散、さらには統一ばかりを、それがいかに重要であれ、問題にしているとはいけない。私達は、考察対象間の相互的影響についても、それらを包み込む経済的・社会的・文化的・政治的連関についても、接近や反発の過程についても、ある文化が他の文化に接近する（移転の）途上でそれらの構成要素が融合することについても、考察対象間の境界がますます不鮮明になるという問題、つまりそれらの相互浸透についても問うことになるであろう<sup>8)</sup>。その際、モデルの射程力が問われなければならないし、また、モデルの変更が射程力の変化につながることで、そしてその用いられるモデルの種類によっては、しばしば問題の収斂よりもむしろ新たな相違の拡大をもたらす場合があることを考慮に入れなければならない。新たな発想が必要であり、歴史的比較研究と相互関係史との新たな融合の展開が試みられるであろう。そしてそれが、我々の研究センターに方法的に際立った特徴を付与するはずである。

### ・ 視角としての市民社会

最後に、研究センターは、「市民社会」という観点から、ヨーロッパ史に取り組むであろう。「市民社会（Zivilgesellschaft）」（Bürgergesellschaft）とは、ここでは、啓蒙期におけるヨーロッパの言説の中で姿を現わし、多様な批判や多くの変化にさらされ、1980年代の東中欧における共産主義的独裁に対する批判の中で新たな現実的活力を獲得し、ヨーロッパや北アメリカの外部でも政治的・知的議論の中で作用を及ぼした、社会的・政治的・経済的そして文化的秩序の一つのモデルを意味している。開かれた社会、多元主義、人権と市民権、法治・立憲国家、公共性（世論）、民主主義、批判、内的多様性、過程から学ぶ能力がこれに属するものであり、過度な社会的不平等や連帯の解体は、このモデルとは相容れない。市民社会のモデルが18世紀に現れた時、それは明白にユートピアの特徴を備えていた。過去200年の間に、この市民社会モデルは根本的に変化した。それは、20世紀の破局の中でほとんど失われかけた。今日においても、市民社会モデルは、どこでも完全には実現していないし、しばしばその存在を脅かされている。この市民社会モデルには、いまなおユートピア的要素が含まれている。ヨーロッパの将来は、大陸の内的統合が市民社会モデルに応じて進展するのに成功するかどうかに決定的に依存するだろう。

「市民社会」という考え方は、これまで様々な定義されてきたが、1980年代以降数多くの議論の中心に位置するようになり、18世紀以降の経済・社会・政治・文化の歴史叙述（社会構造史）という複雑な企図におおまかな構造を

与える上で有用なものとなっている。少なくともヨーロッパについては、そうである。以下に示すように、市民社会モデルは、ユートピア的プロジェクトとして18世紀啓蒙主義の言説の中で現れた。過去20年間にとりわけドイツ語圏の中欧諸国で集中的に研究された市民層の歴史は、市民層文化の探究を越えて、市民社会（bürgerliche Gesellschaft）ないしは市民社会（Bürgergesellschaft）に対する関心に新たな刺激を与え、それにともなって、以前イギリスで行われていた市民社会（civil society）についての議論と少なくとも繋がりを考察をもたらした。80年代には、市民社会の名において独裁的共産主義を批判することにより、東中欧の知識人や体制批判者が市民社会のビジョンに新しい力を与えた。近年、市民社会というコンセプトは、ラテンアメリカ、アジア、そしてアフリカの知的・政治的議論においても用いられているが、そこではしばしば非政府組織（NGO）のような形での、あるいは権威主義的ないし独裁的支配者に対する抵抗の中での自律的な社会的動員に限定されて用いられている。このような限定された形については、以下で論じることはできない<sup>9)</sup>。

将来の市民社会のイメージにとって中心的な重要性をもってきたし、現在でももつのは、自由で自立した諸個人から構成される近代的で多元主義的で世俗化された社会というビジョンであった。これらの諸個人は、平和的かつ理性的に競争や自発的な協同と連合を通じて相互の関係を調整し、過度の社会的不平等や官憲国家的保護監督は排除される。こうしたビジョンの実現のためには、一定の制度的取り決めが必要とされた（し、今も必要である）。すなわち、人権

および市民権の保障，家族の保護，市場，公共性（世論），諸利害の自由な表明と自律的な組織化の可能性，通常国民国家の形態をとり相当大きな参加可能性が開かれた法治・立憲国家。こうした市民社会プロジェクトの基本要件は，社会組織の特定の原理と分かちがたく結びついていた（し，また今も結びついている）。それは，18世紀および19世紀初めに市民的なものとして特徴づけられ，その後市民層を越えてより広い層に広まったが，普遍的に実現したり自明のものとなることは現実にはなかった。労働，業績，成功こそが生まれや特権ではなく，富，名声，権力の配分を決定すべきである。一般教養としての教育と修得可能な能力をもたらす教育に，最大の重要性が与えられた。正当性の根拠としては，公共的言説が，伝統を補完しそしてそれに取って代わる。私的領域と公的領域とは明確に区別されるべきである。特定の態度，規範，文化的実践たとえば自立と寛容，自然界に対する優越の明確な考え，特定の美的基準，学問の尊重が，万人共通のものとなるべきであったし，今日もそうである<sup>10)</sup>。

市民社会のプログラムは，その普遍的妥当性と全世界的拡大を求めてきたし，また求めている。しかし同時にこのプログラムは，その生成期や初期には小市民（あるいは市民-貴族）的社会環境と結びついていた。このことは，それがそもそもこの社会環境から現れたということのみよるのではなく，自らが公民 Staatsbürger（市民 citizen）として，したがって市民社会の完全な主体としての資格を手に入れるためには，市民の地位（市民性，Bürgerlichkeit）それには財産と教養また

は官職に基づく自立性が含まれるが必要であったという意味でもそうである。このことは，19世紀および20世紀初頭の選挙権の制限が明らかに示しており，社会の半数を占めている女性と下層の大衆は，いずれにせよ市民社会プログラムの要求と約束から部分的に排除されたままであった。普遍主義的要求と排除の現実との対立このダイナミズムを内蔵した乖離を減じるには2世紀に及ぶ時間が必要であり，長期にわたり最もラディカルにはマルクス主義的批判と労働運動が，後にとりわけ20世紀にはフェミニスト運動が，そして全時期を通じて自由民主主義的改革論者たちが，異議申し立てを行なった。批判者たちは，本質的に市民社会プログラム自体の要求と約束に立脚して，そのより一貫した実現を要求した。彼らは，ある意味で市民社会プログラムを言質として受け取ったのである。したがって，19世紀の根本的なコンフリクトや変化は，以下のように理解される。様々な次元での民主化，社会国家の興隆，そして最後には両性の平等に向けた重要な前進。20世紀に，新たな困難，危険，危機が生じた。市民社会の歴史は，とりわけ大規模な戦争と，20世紀に右翼からも左翼からももたらされた新しい種類の独裁制の結果，深刻な逆行と挫折を被った。この独裁制は，市民社会プログラムの真向からの否定として理解され得るし，またこの間にそれ自身が克服されたものとなった。こうした闘争の中で，市民社会概念は変化し，また民主主義的にも，社会的にも，そして最後に両性間の関係に関連しても拡大された。市民社会概念は，普遍妥当性 的要求を放棄したくないのであれば，今日の環境問題を考えるだけでも将来も自ら変化しなければならないだろう。市民社会概念は，まだ世界のどの場所でも

完全には実現されておらず、その世界全体への拡大はようやく始まったばかりである。それにもかかわらず、20世紀末のヨーロッパの現実には、すくなくとも過去200年間のいかなる時にもまして、もっとも市民社会モデルに接近している<sup>11)</sup>。

「市民社会」概念の論理的な位置は、規範的次元と分析的次元との間で揺れ動いている。このことは、過去においても現在においても明らかであり、またそう望まれたことでもある。というのは、そこから、現在の重要な諸論争におけるこの概念の実際の意義が生じているからである。同時に、この概念は、それを理念的に用い、以下のような問いかけを行なう場合には、学問上有用である。ヨーロッパの様々な国や地域で市民社会がどのようにして発展してきたのか。どのような推進力に基づいてまた非市民社会的諸関係とどのように絡み合いながら発展してきたのか。どのような類似性と相違性を伴いながら発展してきたのか。どのような相互作用が市民社会の発展を促し、妨げ、そしてその特徴を刻み込んできたのか。その発展は、どのような画期を持ちまたどのような危機を通り抜けてきたのか。また、発展の不均等性と多様な道については、どのようなことが言えるのだろうか。そして、市民社会的に統合するヨーロッパに向かうのか、それともそうではないのか。

もちろん、市民社会のプログラムとその実行に関しては、国際的および文化的な大きな相違がありうる。同様の目標について考えながら、それらが様々な文化的コンテキストの中で異なって表現されるかもしれない。市民社会は、

様々な言葉で語られ、また表現されている。それに伴って生じている「翻訳」という問題は、複雑であると同時に刺激的でもある。市民社会についての表象・プログラム・概念は、そのヨーロッパ内での移動 またそれによる意味内容の変化 が検討されねばならない現象の一つでもある。このことは、結局、自己批判的反省のきっかけを与えるものである。つまり、本来西欧的な刻印をおびたプログラムが東欧に広がっていったことは、このプログラムの独自性に対する視点、すなわち、それを実現しうる条件と限界、そこに内在する緊張や矛盾、そしておそらくはこのプログラムに対するオルタナティブについてさえもの視点を開いてきた（し、今も切り開いている）。それに照応して、これまでとりわけ西欧の現象の考察においてその有用性を示してきた市民社会モデルを東欧の歴史分析に用いることは、このモデルそのものの批判、ひいてはその相対化や再定式化へとつながりうるかもしれない。歴史的比較は、その出発点において明確な概念を必要としている。しかし、概念はしばしば、その比較における応用の中で、それ自身変化するのである。

\* 本稿は、マンフレート・ヒルダーマイヤー（Manfred Hildermeier）、ハルトムート・ケルブレ（Hartmut Kaelble）、ホルム・ズントハウゼン（Holm Sundhaussen）および筆者〔Jürgen Kocka〕によって、1997年にフォルクスワーゲン財団に対して提出されたヨーロッパ比較史のための研究センター設立に関する提案の一部に対し加筆修正を行なったものである。この提案を基礎として、1998年に、ベルリンの自由大学とフンボルト大学によって共同で担われ、上記4名に指導され

た「ヨーロッパ比較史研究センター」が設立された。このセンターは、18世紀以降の近現代史との関連においてとりわけ4つの研究領域の問題に取り組んでいる。すなわち、ヨーロッパ公共圏の歴史について、国民的および社会的なアイデンティティ形成の言説について、政治的支配と近代化と参加型政治文化について、そして「18世紀以降の市民、市民性、および労働に対する考え方」についてである。このセンターは、とりわけフォルクスワーゲン財団による資金提供によってさしあたり5年間存続する。本稿をここ〔*Europäische Sozialgeschichte: Festschrift für Wolfgang Schieder*, Hrsg. C. Dipper, L. Klinkhammer und A. Nützenadel, Berlin 2000〕に掲載することを許してくれたことについて、私は上記3人の同僚に感謝する。というのは、本稿は、私たちが集中的に議論する中で作成されたものであり、多くの点において、ひとつの共同作業の所産だからである。

## 注

- 1) Vgl. *Dietrich Geyer*, Osteuropäische Geschichte und das Ende der kommunistischen Zeit, Heidelberg, 1996; *Karl Schlögel*, Jenseits des Ostblocks — ein Geschichtsraum im “Jahrhundert der Wölfe”, in: Europa-Universität Viadrina (Hrsg.), *Universitätschriften*, Bd. 9 (=Antrittsvorlesungen III), Frankfurt an der Oder 1996, S. 87-105; *H.-J. Axt*, Die Befreiung der Kulturen. Europas Kulturkreise nach dem “Ende der Systeme”, in: *Südosteuropa-Mitteilungen* 33, 1993, S.1-13.
- 2) 最近の事例として、次を参照。 *Hartmut Kaelble*, Auf dem Weg zu einer europäischen Gesellschaft. Eine Sozialgeschichte Westeuropas 1880-1980, München 1987; *Europäisches Geschichtsbuch*, Stuttgart 1992; *Gordon A. Craig*, *Geschichte Europas 1815-1980. Vom Wiener Kongreß bis zu Gegenwart*, München 1995; *H. van Dijk*, *De modernisering van Europa. Twee eeuwen maatschappijgeschiedenis*, Schiedam 1994; *Norman Davis*, *Europe. A History*, Oxford 1996; *Fernand Braudel* (Hrsg.), *Europa: Bausteine seiner Geschichte*, Frankfurt am Main 1988; *Jaques LeGoff*, *Das alte Europa und die Welt der Moderne*, München 1994.
- 3) *Erwin Oberländer* (Hrsg.), *Geschichte Osteuropas*, Stuttgart 1992; *Manfred Hildermeier*, *Von der Nordischen Geschichte zur Ostgeschichte. Osteuropa im Göttinger Horizont*, in: Hartmut Boockman / Hermann Wellenreuther (Hrsg.), *Geschichtswissenschaft in Göttingen*, Göttingen 1987, S. 102-121.
- 4) Vgl. *Bernd Faulenbach*, *Ideologie des deutschen Weges. Die deutsche Geschichte in der Historiographie zwischen Kaiserreich und Nationalsozialismus*, München 1980; *Helga Grebing*, *Der “deutsche Sonderweg” in Europa 1800-1945. Eine Kritik*, Stuttgart 1986; *Jürgen Kocka*, *Ende des deutschen Sonderwegs?*, in: *Wolfgang Ruppert* (Hrsg.), *“Deutschland, bleiche Mutter” oder eine neue Lust an der nationalen Identität?*, Berlin 1992, S. 9-31; ders., *Nach dem Ende des Sonderwegs. Zur Tragfähigkeit eines Konzepts*, in: Arnd Bauerkämper u. a. (Hrsg.), *Doppelte Zeitgeschichte. Deutsche Beziehungen 1945-1990*, Bonn 1998, S. 364-375; *Schelley Baranowski*, *East Elbian Landed Elites and Germany’s Turn to Fascism: The Sonderweg Controversy Revisited*, in: *European History Quarterly* 26, 1996, S. 209-40; *Hans-Ulrich Wehler*, *Deutsche Gesellschaftsgeschichte*, 3 Bde., München 1987 u. 1995.
- 5) 広範でより詳細な参考文献については、以下を参照。 *Heinz-Gerhard Haupt / Jürgen Kocka*

- (Hrsg.), *Geschichte und Vergleich. Ansätze und Ergebnisse international vergleichender Geschichtsschreibung*, Frankfurt am Main 1996, bes. S. 9-45 (Einleitung der Hrsg.), S. 47-90 zur Historiographie in einzelnen Ländern sowie S. 91-130: *Hartmut Kaelble*, *Vergleichende Socialgeschichte des 19. und 20. Jahrhunderts. Forschungen europäischer Historiker. Zuletzt und vor allem: ders., Der historische Vergleich. Eine Einführung zum 19. und 20. Jahrhundert*, Frankfurt am Main 1999.
- 6) こうした観点に基づいてハルトムート・ケルブレが次の書物の中で作成した社会史的比較の文献目録がある。Haupt / Kocka (Fn. 5), S. 111-130 sowie bei *Kaelble*, *Der historische Vergleich* (Fn. 5) S. 163-179. しかし, 東ヨーロッパの歴史についての比較研究の状況については以下を見よ。 *Fikret Adanir* u. a., *Traditionen und Perspektiven vergleichender Forschung über die historischen Regionen Osteuropas*, in: *Osteuropäische Geschichte in vergleichender Sicht (=Berliner Jahrbuch für osteuropäische Geschichte 1996/1)*, S. 11-43 (mit zahlreichen Nachweisen) sowie die weiteren Beiträge dieses Klaus Zernack gewidmeten Bandes. Vgl. u. a. *Jenő Szűcs*, *Die drei historischen Regionen Europas*, Frankfurt am Main 1990; *Klaus Zernack*, *Die vier großen Regionen der osteuropäischen Geschichte*, in: ders., *Osteuropa. Eine Einführung in seine Geschichte*, München 1977, S. 31-66; *Gottfried Schramm*, *Militarisierung und Demokratisierung: Typen der Massenintegration im Ersten Weltkrieg*, in: *Francia* 3, 1975, S. 476-97; *Werner Conze* u. a. (Hrsg.), *Modernisierung und nationale Gesellschaft im ausgehenden 18. und 19. Jahrhundert. Referate einer deutsche-polnischen Historikerkonferenz*, Berlin, 1979; *Heiko Haumann*, *Unternehmer in der Industrialisierung Rußlands und Deutschlands*, in: *Scripta Mercaturae. Zeitschrift für Wirtschafts- und Sozialgeschichte* 20, 1986, S. 143-161; *Holm Sundhaussen*, *Der Wandel in der osteuropäischen Agrarverfassung während der frühen Neuzeit. Ein Beitrag zur Divergenz der Entwicklungslinie von Ost- und Westeuropa*, in: *Süd-ost-Forschungen* 49, 1990, S.15-56; *Manfred Hellmann*, *Die Geschichte Osteuropas im Rahmen der europäischen Geschichte*, in *Historisches Jahrbuch* 94, 1974, S. 1-24.
- 7) *Werner Conze*, *Ostmitteleuropa. Von der Spätantike bis zum 18. Jahrhundert*, hrsg. v. Klaus Zernack, München 1992.
- 8) これについては, 以下の書物から重要な刺激を受けた。 *Michel Espagne / Michael Werner* (Hrsg.), *Transfers culturels. Les relations interculturelles dans l'espace franco-allemand (XVII-XX siècles)*, Paris 1988; *Michel Espagne*, *Sur les limites du comparatisme en histoire culturelle*, in: *Genèses* 17, 1994, S. 102-121. Siehe auch *Michel Espagne / Matthias Middell* (Hrsg.) *Von der Elbe bis an die Seine. Kulturtransfer zwischen Sachsen und Frankreich im 18. und 19. Jahrhundert*, Leipzig 1993. - Weiterführend die Arbeiten von *Jürgen Osterhammel*, etwa: *Transkulturell vergleichende Geschichtswissenschaft*, in: Haupt / Kocka (Fn. 5), S. 271-313.
- 9) Vgl. bereits *Thomas Nipperdey*, *Deutsche Geschichte 1800-1866. Bürgerwelt und starker Staat*, München 1983, S. 255-271; *Jürgen Kocka* (Hrsg.), *Bürger und Bürgerlichkeit im 19. Jahrhundert*, Göttingen 1987; ders. (Hrsg.), *Bürgertum im 19. Jahrhundert. Deutschland im europäischen Vergleich*, 3 Bde., München 1988, bes. Bd. 1, S. 11-76; *Lothar Gall*, *Bürgertum in Deutschland*, Berlin 1989; *Klaus Tenfelde / Hans-Ulrich Welher* (Hrsg.), *Wege zur Geschichte des Bürgertums*, Göttingen 1994. - *John Keane*, *Democracy and Civil Society*, London, 1988; *Bronislaw Geremek*, *Civil Society Then and Now*, in: *Journal of Democracy* 3, April 1992, S. 3-12; *Naomi Chazan*, *Africa's Democratic Challenge*;

- Strengthening Civil Society and the State, in : World Policy Journal 9, 1992, S. 279-308; *M. A. Weiglé / J. Butterfield, Civil Society in Reforming Communist Regimes: The Logic of Emergence*, in: Comparative Politics 25, 1992/ 93, S. 1-23; *Larry Diamond, Rethinking Civil Society. Toward Democratic Consolidation*, in: Journal of Democracy 5, Juli 1994, S. 4-17; zuletzt *Johan Keane, Civil Society. Old Images, New Visions*, Cambridge 1988; *Ferenc Miszlivetz, Illusions and Realities. the Metamorphosis of Civil Society in a New European Space*, Budapest 1999.
- 10) 議論への導入として, *K. Michalsky* (Hrsg.), *Europa und die Civil Society, Castalgandolfo-Gespräche 1989, Stuttgart 1991* (darin vor allem die Beiträge von Edward Schils, Charles Taylor, Ralf Dahrendorf u. Bronislaw Geremek); *Bert van den Brink / Willem van Reijen* (Hrsg.), *Bürgergesellschaft, Recht und Demokratie, Frankfurt am Main 1995*, bes. die Beiträge von Bert van den Brink, Ralf Dahrendorf u. Michael Walzer; *Andrew Arato / Jean L. Cohen* (Hrsg.), *Civil Society and Political Theory, Cambridge Mass. 1992*; daneben *Jürgen Habermas, Faktizität und Geltung. Beiträge zur Diskurstheorie des Rechts und des demokratischen Rechtsstaats, Frankfurt am Main 1992, S. 399 ff. Kritisch: Christopher M. Hann / Elizabeth S. Dunn* (Hrsg.), *Civil Society. Challenging Western Models, London 1996*.
- 11) Vgl. *Kocka* (Hrsg.) (Fn. 9), Bd. 1., S. 9-75: Das europäische Muster und der deutsche Fall (bes. S. 24-32); ders. *The Difficult Rise of a Civil Society: Societal History of Modern Germany*, in: Mary Fulbrook / John Breuilly (Hrsg.), *German History since 1800, London 1997, S. 493-511*.
- < 訳者付記 >
- a) 本稿は, ユルゲン・コッカ氏の論文, Jürgen Kocka, *Zivilgesellschaft als historisches Projekt: Moderne europäische Geschichtsforschung in vergleichender Absicht*, in: *Europäische Sozialgeschichte, Festschrift für Wolfgang Schieder*, Hrsg. C. Dipper, L. Klinkhammer und A. Nützenadel, Duncker & Humblot, Berlin 2000, S.475-484. 所収, を全訳したものである。
- この論文を翻訳したいという訳者のひとり(松葉)の願いを快く受け止め, 翻訳許可を与えてくれた著者に, 心から感謝する。
- b) 訳文に付した傍点は, 原文イタリックを示す。また,〔カッコ〕内は, 訳者注である。
- c) 原文では注は各ページごとの脚注となっているが, 本訳稿ではそれらを文末にまとめた。また, 通常, 注記にあたっては書名の活字をイタリック体とするが, 原文では著者名の方がイタリックとなっている。おそらく, 著者(と出版社)が意識的にそうしたと考えられるので, 本訳文の注記もその点は原文のままとした。
- d) 本稿の内容の一部が, ユルゲン・コッカ氏の別稿 *The Difficult Rise of a Civil Society. Societal History of Modern Germany*, in: Mary Fulbrook (ed.), *German History since 1800*, London, Arnold 1997. と重なっている。後者については, 先に松葉が山井敏章氏と共同で翻訳し, 「市民社会の困難な成立 近代ドイツの社会構造史」『思想』岩波書店, 1998年9月号所収, として公表した。
- 本稿での翻訳に際し, 山井氏の同意を得て, 後者の訳文をあらためて参照し利用した。もちろん原文は, 本論文がドイツ語, 後者が英語でそれぞれ異なっていることに十分留意し, 本稿での翻訳は, あくまでそのドイツ語原文に即して, 厳密を期した。
- e) 翻訳は, まず最初に斎藤が全体の訳文草稿を作り, それに松葉が補筆と修正を加えた。その上で, 更に両者の間で協議と推敲を重ねて最終稿が作成された。その過程で, 立命館大学経済学部教授山井敏章氏から翻訳の内容に対して

数々の貴重なご教示を賜った。その結果、訳文は大幅に改善され、また少なからぬ誤訳が訂正された。厚く御礼を申し上げます。もちろん、本訳文にそれでもなおありうる誤りについては、全て訳者とりわけ松葉が責を負っている。